魔戦姫
紗夜
さや
淫辱の闘宴
小説 斐芝嘉和
挿絵 竜胆
立ち読み版

第一章　戦姫紗夜、出陣　006
第二章　三尸の罠　037
第三章　兆し　064
第四章　淫辱尋問　076
第五章　精宴　099
第六章　戦姫、堕ちる　155
終章　堕落の果てに……　223

登場人物紹介

Characters

柚木（ゆずき） 紗夜（さや）

大祝族の分家の血を引く少女。気を貯める『器』の能力があるが、本人は気付いていない。ストレートの黒髪は尻に届くほど長く、胸は小ぶりな美乳。突如起こる呪詛災害を抑えるべく闘う呪装自衛隊に入隊したばかり。

美島（みしま） 由佳莉（ゆかり）

黒髪ポニーテールが特徴的な、大祝族の分家の血を引く少女。呪装自衛隊では紗夜の先輩にあたる。大小の日本刀を使いこなす。

越智（おち） 芽衣子（めいこ）

肩の辺りで切りそろえた黒髪が特徴の、大祝族の分家の血を引く少女。由佳莉とともに、紗夜を指導していた。戦闘では和弓を主として使う。

三尸（さんし）

かつて大祝族から破門された荒神族の指導者たち。魔物を使い、全国でテロ行為を繰り返す。

第一章　戦姫紗夜、出陣

＊　＊　＊

「く……うぅっ⁉」

自在にのたうつ数千本の触手に腕や脚を取られた紗夜は、怯える心を叱咤して、なおも懸命にもがいていた。いくら三節棍化した紫電でも、手足を動かせないのでは振るいようがない。手首を回してなんとか刃を振ってみるが、法弾を喰らっていない魔物の再生能力は凄まじく、断ち斬ったそばから新たな触手が生え出してくる。

にゅるり、ぎゅちち――籠手に巻きついた触手が肘を締めつけ、二の腕まで這い登ってくる。インナースーツ越しに柔肉を揉み込んでくる、コリコリとしたイボの感触。

鎧骨に施された防御呪が自動発動し、不埒な肉紐をいくつか灼いたが、あまりにも数が多すぎる。それに、鎧骨に護られていない部分も多い。

そのうちのひとつ、左右の膝に、ギュチギュチと擦れ合う肉紐が巻きついてきた。漆黒のレオタードに護られた太腿が不気味に脈動する触手に撫で回される。不気味に蠢く小さな吸盤が感じやすい内腿に吸いつき、薄布越しにキスの雨を降らしてくる。

さらに――。

「くっ⁉　あ……ッ⁉　い、いやらしい！」

草摺りの下に潜り込んできたいくつもの肉紐に、プリッと引き締まった美尻がムニムニと揉み込まれた。布越しにも感じる熱、硬さ。生理的な嫌悪感を掻き立てる、生温かなぬめり具合。それだけならまだしも、

「ふぁっ⁉　な、なぜ、そんなところを……うぅっ⁉」

尻穴をグリグリと押され、耳の先まで真っ赤になる戦姫。

紗夜は由緒正しき柚木神社の跡取り娘として、丁寧に大切に育てられてきた。見られただけでも穢れるから、と父親以外の男性を遠ざけられていたほどだ。

実際に男を目にしたのは五歳のころだが、男と女とでは身体に違いがあると知ったのは数年前――魔物に父親を殺され、仇を討つのだと誓った日のあと。

急速に学んだため、性に関する知識は穴だらけで歪だが、しかし身体をまさぐられることに対する嫌悪や羞恥は生理的な反応だ。

まして、容赦なく揉みまくられているのは、あると思うことすら穢らわしい排泄孔。

（魔物って……こんなおぞましい習性があるの⁉）

幼さを残した頬が怒りに歪む。あまりにも臓腑が煮えくり返るから、触手に巻きつかれた手足が強張り、骨身にまで染み着いていたはずの呼吸法が乱れてしまう。

「う……あっ⁉　そ、そっちは……ぁあンッ⁉」

股間にも、硬くて熱い弾力が殺到してきた。大小十数本の触手が餌に群がる鰻のように、恥ずかしい割れ目の上でムギュムギュギュチギュチとせめぎ合う。指先のような感触に、他人に触らせてはいけない秘処が蹂躙されてしまう。

インナーに護られているとはいえ、その布地はあまりにも薄い。感じやすい肉畝がひしめく亀頭に揉みくちゃにされ、小刻みにズレ動く裏地に敏感なクリトリスがキュッキュッ

としごかれ、クニクニ捏ねられ――。
（な、なに……や、やだ、身体が……ああ、変！　お、おかしい！）
渦巻く嫌悪を貫いて、ときおり閃く恥ずかしい悦感。
気持ち悪いはず、イヤなはずなのに――無数の亀頭に揉みくちゃにされている秘裂が、ジワリジワリと熱くなってきた。柔らかな裏地にしごきまくられた淫唇が甘く痺れ、腰から下の感覚が薄れていく。
（変、変だわ……私の身体、おかしい……た、戦わないと、いけない……のにっ！）
なぜか手足から力が抜ける。焦れば焦るほど呼吸が乱れ、気の供給が追いつかなくなる。
文字通りの箱入り娘だった紗夜が自慰という性戯を知ったのは、やはり数年前だ。しかも、してはいけないこととして学んだ。みだりに触れると気が乱れ、いざというときに戦えなくなるから、極力控えるように――と。
だから、紗夜はいまだにオナニーを知らない。
知識としては知っていた「快感」というものを、いま、生まれて初めて体験したのだ。
（こ……これが、快感？　こんなのが、快感……た、確かにちょっと、気持ちイイ……うう、そんなことない、絶対にない！　相手は魔物なのよ、気持ち悪いのよ！）
心を裏切って感じてしまう己の身体に戸惑い、羞じらいながら持て余していると、
「あンっ!?　やンッ!?」
鎧骨に護られているはずの小振りな美乳にも、おぞましくぬめる肉紐が巻きついてきた。

動きやすさを優先したデザインだから、襟に当たる部分や腋下などは意外に無防備で、触手の侵入を許してしまったのだ。
紗夜の小振りな美乳に合わせてデザインされた緋色の胸部装甲の下、硬いイボを生やしたしなやかな触手に、乳丘の麓が締めつけられる。それほど深くはない胸の谷間に、芋虫の腹にあるような肉肢の列がモゾ、モゾ、と這う。
数筋の肉紐が、細かく震えながら蚯蚓のように伸縮し――まるで数十本、数百本の指先が群がり、乳房の柔らかさを確かめられているような――。
美しい曲面に寄り添ってトグロを巻いた肉蛇は、薄いインナースーツにプクッと浮き上がっている乳首を見つけ、亀頭状の尖端を擦り寄せてくる。
「くっ⁉　あ、あ……ッ⁉　やだ、か、か……噛むなぁッ！」
淫核に次いで敏感な肉豆が、ふたつの弾力に挟まれてクイ、クイ、と締めつけられた。触手の尖端、鈴口にも似た小さな口に、乳首を咥え込まれたのだ。
「やめ……や……やぁあっ！」
胸先と股間に産みつけられる、心地よい感覚。
恥じて捩れる背筋にも、内を向いて閉じようとする太腿にも、生臭い粘液に濡れた触手がニュルリニュルリと這い回る。せめぎ合う亀頭に撫で回される美尻、キリキリと締めつけられて無数のイボに揉みまくられる左右の乳房。喘ぐ唇にも真っ赤な肉瘤が迫る。羞恥に赤らんだ頬にも、竦めたうなじにも、穢らわしい粘液が容赦なくすり込まれる。

「く、うぅ……ッ！」

込み上げてくる嫌悪に歯軋りした紗夜は、ふと思いついて力のかけかたを変えた。いままでは身体を護ろうとして必死に内側へ向けていたのを、逆に外へ外へ、グイグイ押し拡げるように――案の定、それまで華奢な戦姫の手足を外へ広げようとしていた触手たちが、逆に内側へ押してくる。

（やはり……たいした智恵はないんだわ。押されたら押し返し、引かれたら引っ張り返すだけ……ならば！）

本来の意図をひた隠しにして、紗夜は一生懸命腕を広げようとした。うねる肉紐たちは反射的に押し返し、左右の腕を近づけてくれる。

手も足も出ないこの状態でも、左右の籠手に仕込んだ隠し武器を使えば脱出できる――一縷の望みに賭けて、両腕に意識を集中していると。

「ふ……あっ!?　く、うぅ……ッ！」

蠢く肉紐に群がられた伸びやかな脚が、大きくガニ股に開かれた。柔らかな内腿や膝裏に新たな亀頭が殺到。インナースーツの薄い布越しに、瑞々しい弾力を確かめるように、ムニムニと揉み込まれてしまう。

想像するだにみっともない格好――だが、恥じている余裕はない。

無防備になった尻穴には、親指くらいの太さの弾力が執拗に擦りつけられていた。羞じらう括約筋が布地越しに揉みまくられる。飽くことなく繰り返される愛撫に、繊細な菊膜

がジワジワと温かくなり、意思に反して蕩けていく。
「くひっ⁉　あ、あ……あひぅっ⁉」
布地越しに、キュッと噛まれる淫核。
弾ける悦感に思わず反り返ると、悶える美少女を祝福するように何百、何千という触手が一斉に震え――びゅくっ！　ビュククッ！
ドピュピュッ！　ビュルルッ！
「ッ⁉」
顔や髪に、青臭い粘液がいきなり浴びせられた。
咄嗟に口を閉じたのに、数滴のダマが飛び込んでしまい、舌がヌチョッと粘つく。生臭くて苦しょっぱい、不快な味が、口腔に広がる。
鎧骨の下にある乳房にも、いくつもの亀頭に責め立てられていた股間にも、布越しに揉みまくられていた尻穴にも――熱いぬめりがヌチャッと粘つく。小刻みに震える亀頭によってすり込まれ、細かな布目を染み抜けて、羞じらい火照る柔肌をいやらしく濡らす。
「な……なに……これ……」
一瞬、呆けたような顔になった紗夜は――。
「……穢らわしいっ⁉」
子種の液――精液を浴びせられたのだと気づき、カッとなった。
本能的な憤怒、生理的な嫌悪。頬に粘つく熱い粘液が、どうしようもなく気持ち悪い。

第五章　精宴

羞じらう戦姫の前にコロつきの点滴架台を立てて、劣情を剥き出しにした男がいやらしく笑った。が、紗夜にはよく分からない。T字に組まれた細い架台と、そのアームに吊り下げられた小振りで透明なふたつのバケツ、その底から伸びるゴムチューブはY字の接続管を経て一本のチューブに纏められ――ているのはもちろん分かるが、その用途は？

「このバケツに、豚姫様の大好物である精液を入れます。で、こちらの管を、先ほどウンチの穴に挿入れたプラグに繋ぎます。その状態で精液の入ったバケツを、豚姫様のお尻より高い場所へ持ち上げたら――さて、どうなりますかな？」

「う、あ……ああっ！　イヤ、イヤよそんな……やめてぇっ！」

ようやく理解した戦姫が、恥辱の予感に我を失う。つまりこれは、青臭くておぞましい白濁液を浣腸するための道具なのだ。秘裂にすり込まれただけでも鮮烈な快感を発した牡エキスを、胎内に強制的に注ぎ込まれてしまうのだ――。

「汚い、汚いッ！　やめて、イヤッ！　そ、それに……そんなこと、されたら……」

きっとおかしくなってしまう、淫悦の虜になってしまう――。

予感ではなく、確信。

いまでさえ、咽ぶほど濃密な青臭さに半ば酔い、朦朧としかけているのだ。精液をほんの少しだけ塗りつけられた割れ目は燃えるように熱く、淫唇やクリトリスが焦れったくてもどかしい。

指に掬った程度の量で、こんなにも狂おしく疼くのならば、あのバケツ一杯――いや、

ふたつ並べられているから二杯か。どちらにも一〇〇〇の目盛が振ってあるから、ふたつで二千ｃｃ。そんなにも大量の白濁液を、排泄孔に注ぎ込まれたら――。

「ひ……ひぃぃぃッ！」

想像した途端、尻穴に喰い込んでいるアナルプラグを強く強く意識してしまった。

この恥ずかしくて穢らわしい肉穴が、男根を求めて疼いてしまうのか？　穴の表面だけでなく、奥の奥まで、淫らに作り替えられてしまうのか。

「いや……いやいや、やめてお願い、お願いだから……やめてぇえっ！」

拘束された身体を駄々っ子のように跳ねさせ、手足に絡みついた鉄パイプをギシギシと鳴らす紗夜。背のうしろに垂れる長く艶やかな黒髪が激しく揺れ、薄闇に漂う甘酸っぱい芳香がグッと濃くなる。

羞じらう心とはうらはらに、精臭を嗅いで発情した女体が毛穴という毛穴を開き、ねっとり濃密な牝フェロモンを噴き出して、牡たちを誘ってしまうのだ。

「ワガママを言わないでください、豚姫様」

「豚姫様はすでに淫の存在。精液を取り入れなければ気は枯渇するばかりなのですよ」

劣情を露わにした男たちがいそいそと動き、精液浣腸の準備を始めた。

Ｙ字接続管の下に伸びるゴムチューブを、紗夜の尻穴から生えた管に接続。

別の男が点滴架台を調節して戦姫の目の高さに合わせ、足元に置いたブリキの寸胴バケツから透明なバケツへ、柄杓（ひしゃく）で白濁液を移し始める。

柄杓から滴る大きな珠の、ツゥッと伸びる糸がおぞましい。
（そんな、そんな……そんなに、たくさん⁉）
息を呑んで見守るうちに、目の前にふたつ並べられたバケツがともに満たされた。
「さあ、行きますよ」
Y字接続管の上、それぞれのバケツに伸びているゴムチューブの片方に男の手が伸び、途中を噛んでいたクリップが外される。
「あ、あ……」
粘る液体が下るにつれて、ゴムチューブが太り、揺れた。
「やめて、いや……やめてぇっ！」
叫ぶ美少女の尻穴に、第一陣が到着。尻穴にはまってもどかしさを発しているアナルプラグのさらに奥に、冷たいぬめりがヌヌッと広がる。
直腸に触覚はないはずだが、なんとなくネバネバしているような気がした。排泄反射を起こして消化器官が蠕動すると、擦れ合う粘膜の間におぞましい精液が滑り込み、余計にヌチャヌチャと塗り広げられるような――。
（ダメ、やだ……気持ち悪いッ！）
蠢く下腹がキュルキュルと鳴るたび、気が遠くなるようなおぞましさが膨れ上がる。粘膜から吸収された牡エキスが血流に乗って全身を駆け巡る様子をついつい想像してしまい、吐き気すら覚える。

なのに――ダメだ。

重力に引かれた精液は、点滴架台に吊られた小さなバケツから容赦なく流れ落ちてくる。ゆっくりと、しかし確実に、腹の中へジワ、ジワ、と満ちてくる。

柔らかな下腹部が、冷たい粘液に押し拡げられる。逆流してくる汚物に反応して、排泄器官が腹痛を発しながら鋭く激しく捻れ悶える。

「き、汚い……汚い、汚いッ！」

「ええ、汚いですよ。なにしろこれは、豚の精液ですからね。普通の女性であれば発狂してもおかしくはない」

「しかし豚姫様なら平気でしょう。ほうら、どんどん入っていく」

「や……えぁ……やめ……は、うぅっ！」

失神しそうなおぞましさを感じているのに、キュルル、クポポ、と鳴る腹のあちこちに刺すような痛みが閃き、余計に意識がハッキリしてしまった。便意が高まり、いまにも汚物が噴き出しそうな気配。

「ん、ン、んんぅぅぅ……ッ！　く、ふ……ぅぅうっ！」

しかし、逆流防止装置のついたアナルプラグが尻穴に引っかかり、出そうで出ない。出したくても出せない。

華奢な点滴架台に吊られたバケツは小振りだが、しかし美少女の腹の容積からすれば十二分に大きいだろう。もう限界だと紗夜が思っても、冷たい粘液はなおもドクドク流れ込

んでくる。排泄反射を起こして下腹がギュルルッと鳴った瞬間は腸圧が高まって逆流防止栓を押し返し、流入が止まるが、それが弛めばすぐに再開。新たに生まれた隙間へ、ヒンヤリとした粘り気が入り込んでくる。美少女の腹腔が、豚の精液で満たされてしまう。

さらに――。

「いや、いや……え？　あ……あがっ⁉」

うしろから前髪を掴まれ、顔が無理矢理仰向けられた。別の手に顎を掴まれ、口が強引にこじ開けられる。

「豚姫様は貪欲な『器』体質ですから、いくらでも入るでしょう？　尻と同時に口からも、注ぎ入れてあげましょう」

ニヤつく男が、怯えた美少女の口に開口器をねじ込む。馬蹄型のシリコンアームが皓歯（こうし）を押し上げ、押し下げて――顎関節が痛くなるほど大きく口が開けられる。

「あが……！　や、は、やめはさい！　ンが、あ、あ……いぁあああ‼」

顔を仰向けたまま呻いていると、閉じられなくなった口に漏斗が立てられた。

（ま、まさか……まさか、そんな……あああっ！）

白濁液の滴を垂らす柄杓が視界をよぎり、漏斗の陰に消える。

「ぇあ、あ……うぷっ⁉　げ、げほっ！」

咳き込む口に容赦なく流れ込んでくる、冷たいぬめり。

無理矢理開かれた口腔に青臭い粘液がたちまち溢れ、咳とともに噴き出して頬や顎にい

やらしく垂れた。味蕾に絡みついてくる苦しょっぱさ、痙攣する喉をノロノロと垂れ落ちていく冷たい塊。

「さあ、さあ！　どんどん呑んでください。いくらでもおかわりできますよ！」

「豚の精液がお好みでしょうが、人間の精液も呑んでくださいね」

さまざまな方向から柄杓が差し出され、漏斗の上で次々に傾けられた。仰向いた顔に糸引く滴が落ちてくる。額にベチャッと粘つき、艶やかな黒髪に垂れて、青白く輝く。

（汚い、汚い……汚いッ！）

こんなおぞましい粘液、絶対に呑み込むわけにはいかない――真っ青になった紗夜は必死に舌を丸め、喉を塞ごうとした。

だが、冷えた精液は口の中へどんどんどんどん垂れてくる。舌根にねっとり絡みつき、奥歯にも、歯茎にも、上顎の粘膜にも、苦しょっぱい粘り気が貼りついてくる。

味蕾に染み込む精液の味。

苦く、しょっぱく、甘辛い。

微かに感じられるザラつきは、白い濁りの正体――精子だろうか？　牡たちの劣情が凝固したような、穢らわしい感触。

（まだ？　まだあるの!?　ああイヤ、こ、こんなに……たくさん……ッ!?）

たっぷり含まれている子種のせいか、粘つく液体が舌に重い。こんな状態でも息はしないといけないから、口から立ち上る濃密な精臭が鼻腔に染み着いて頭が痺れる。

「ンぁ……うぅ……うぶ……」
ステンレスの器具に無理矢理こじ開けられている美少女の口腔に、容赦なく溜まり続ける白濁液。いやらしくぬめり輝く白い粘液に舌の紅さが隠れ、埋もれ、頬の内側粘膜や健康的な歯茎、艶やかな皓歯も、おぞましい粘液に沈む。さらに溜まり、なおも溜まって、閉じられない唇の端からついに溢れ出しそうになり――。
「……うぶぇっ！　えぁ……げほっ！　ぉぶっ！」
いきなり紗夜が咳き込んだ。口の中でずっしり重くなった精液の一部が、舌の隙間から喉へ、強引に潜り込んできたのだ。
美少女の口腔を満たしていた白濁液の半分ほどは、激しい咳に飛ばされて唇の外へこぼれ、頬や顎、鼻や瞼などに青白いダマとなって粘ついたが――。
――ドロリ。
開いた喉へ、残った半分が流れ落ちてくる。
（ああダメ、イヤ……呑みたく、ないっ！）
理性が焦り、髪を引っ張られて仰向けられている顔を必死に揺らそうとする紗夜。
しかし、それより早く、喉仏がコクンと動く。
――ごぷっ！
喉を塞いでいた白濁液が一気に吸い込まれ、食道に粘つく感触が駆け下った。
（あ、ああ……ッ！　呑んじゃった……せ、精液、呑んじゃった！）

パニックに陥る理性とは逆に、身体は本能的に機能する。口の中にモノがある、呑み込まなければ息苦しい――から、小さな喉仏をしきりに動かし、口腔に満ちている冷たい粘り気をゴキュ、ゴキュ、と呑み込んでしまう。冷たく粘る大きなダマが、喉を通りすぎ、小さな乳房の間を抜けて、ゆっくり、ゆっくり、鳩尾へ――。

「おお、なんと大胆な呑みっぷり」

「お顔に似合わず、なかなかいけるクチですなあ」

周りの男たちが下品な声で囃し立てるが、紗夜はそれどころではない。

（の、呑んでる……私、精液を……ああ、ああ、あぁぁぁッ！）

不純物がたっぷりと含まれた粘液の塊が、喉に絡みつきながら落ちていく。口の中がネチャネチャしているように、食道も、胃の腑も、白く濁った青臭い汚液に厚くコーティングされてしまう。

臭い、汚い、おぞましい――のに、

「うぷ……ふぁ、ぁああ……」

空になった口から息を吸い込み、青臭さに染まった空気が肺に届いた途端、安堵の吐息が漏れて頭の中が真っ白になってしまった。あれほど感じていた穢らわしさがウソのように消えて、代わりに膨れ上がるのはどこか気怠い陶酔感。

大量の精液を嚥下したことで、身体がもう一段、堕落したのだ。

（いけない、ダメ……これは汚いのよ、子種の汁なのよ！）

悲鳴を上げる理性を無視して、細い喉はゴキュン、ゴキュンと鳴り続ける。
喉を塞ぐほどの塊はもうないが、舌の根にも歯茎にも、苦しょっぱい粘液は厚く絡みついている。
唾液に熔けたソレを、呑みたい。
微細な子種の一粒たりとも逃すことなく、すべて綺麗に呑み干したい――。
「おかわりを御所望ですか？　はいはい、いま注いであげますよ」
「ンぁ……ン、ン……うぷっ！　ンご……」
漏斗に新たな精液が注がれ、舌に冷たい粘液が乗った。
（イヤ、なのに……汚い……のにぃ……）
こんなことに慣れたくはないが、しかし慣れてしまった。頭の隅ではいまだに嫌悪しているのに、紗夜の身体は精液の味を悦び、そのネチャネチャとした感触に歓喜する。
漏斗で流しこまれてくる精液を舌で受け止め、ある程度まで溜めてから――ゴクリ。
舌の根や歯茎に絡みついてくる冷たい苦しょっぱさが、美味しい。喉の内側にヌルヌルした粘液が薄い膜を張り、唾液がどんどん溢れてくる。鼻腔に充満する濃密な精臭を、芳しく感じてしまう。汚い、おぞましい――心の内に何度も何度も、呪文のように唱えているのに、イヤだと思えない。いくらでも呑めるような気がしてしまう。
「おお……すごいな！　どんどん入っていくぞ！」
「さすがは豚姫様。お顔はこんなに綺麗なのに、浅ましいですなあ」

嘲る声は頭の先ではなく、脚の側から聞こえてきた。
口へ白濁液を注ぎ込まれるというおぞましい体験に動転し、すっかり忘れていたが、イルリガートルとかいう器具で精液浣腸されていたのだ。
ハッと目を向ければ、点滴架台にぶら下げられた透明なバケツの片方が、もう空になりかけている。
（う、うそ……さっきはまだ、あんなにたくさん……あ、ああっ!?）
意識が下腹部に向いて、ようやく気づいた。
いつの間にか、あれほど苦しかった便意が消えている。下腹は相変わらずキュルキュルと鳴っているのだが、それは排泄反射ではなく――注がれている精液を、蠕動する消化器官が器用に吸い込んでいるのだ。
「これが『器』か……なるほど、万人にひとりの逸材だな」
「もういいだろう、ふたつめに切り替えだ」
Y字接続管の少し上、片方のゴムチューブを噛んでいたクリップが外され、空になりかけているバケツの下へ移された。出番を待っていた大量の精液がトロトロと降り始め、紗夜の尻穴へ流れ込んでくる。
（に、二千ｃｃも……入るの？　入るものなの!?）
驚きながら見下ろせば、下腹がポッコリ膨らんでいるような気がする。鎧骨の胸部装甲が邪魔になっているからよくは分からないが、腹の肌が突っ張り、便意とは別の苦しさが

生じ始めていた。
千ｃｃでこうなるのだから、その倍、二千ｃｃも注ぎ込まれたら――それだけでも怖いのに、三人の男たちが足元のバケツに柄杓を突っ込み、
「おい、それは魔物の精液だろう？　混ぜてしまっていいのか？」
「そんなこと言ったって、豚の精液には限りがあるからな」
「豚姫様には申し訳ないが、混ぜモノで我慢してもらおう」
頬に下劣な笑みを浮かべつつ、空になった透明バケツに新たな精液を足し始めた。
どれだけ入れるつもりだ？　まさか、数十個用意されているすべてのバケツの白濁液を、口や尻穴から注ぎ込む予定なのか――？
「え、ぇあ……やぇえぇッ！」
口から精液の滴をこぼし、必死に叫ぶ紗夜。
だが、懸命に叫んだつもりなのに、声は弱かった。
噛まされた開口器のせいで上手く発音できないし、なによりも舌にねっとりと、冷たい白濁液が絡みついている。濃密な苦しょっぱさに舌の根が甘やかに痺れ、思うようには動かせない。
「やぇぇ……やぇぇ……」
幼子のようにイヤイヤと首を振りながら、舌っ足らずな鳴き声になってしまう。
「おい、豚姫様がなにかおっしゃったぞ」

第六章　戦姫、堕ちる

「い、イィッ！　イィ、イイィッ！」
「違うでしょう？　気持ちイイときはなんて鳴くんでしたか？」
「い……イく、イくぅっ！」
「ブッブー！　それは最後の最後。これ以上はもうダメってときの言葉よ。もっともっと気持ちよくして欲しいなら、オマンコって鳴きなさい」
「お……おま、ん、こぉおっ！　オマンコ、オマンコぉおっ！」
三尸に唆されてワケも分からず卑猥な言葉を口走る紗夜は、絶え間なく続く淫悦にヘラッヘラッと微笑んでいた。熱っぽく潤んだ瞳は焦点を失い、目の前の男たちを映すことなく妖しく揺れる。淫らに弛んだ頬を濡らすのは、法悦の涙と甘酸っぱい涎。
精液の味を知った美少女の唇や舌、喉は、膣や肛門と同じ淫穴だ。いまだにオアズケされているせいで、愛液のような涎が垂れる。頬の内側に、舌の根元に、じゅわ、じゅわ、と新たな蜜が湧いてくる。
「あらあら、涎が一杯。だらしないお口ねぇ。ひょっとしておしゃぶりしたいの？」
「し、したい……おしゃぶり、したいぃっ！」
「ならば、紗夜の口マンコにオチンチン挿入れてぇって、可愛く鳴いてみて」
「さ、紗夜の……く、くち、マンコにぃ……お、お……オチンチン、オチンチン、オチンチンッ！　挿入れて、挿入れて挿入れて、オチンチン挿入れてぇええっ！」
教えられたのは卑猥な言葉だけだが、紗夜は熱っぽい流し目で周りの男たちを見回す。

細い腰をくねらせ、魔物に犯されている秘裂をカクン、カクン、と突き上げて、妖しく艶やかに媚笑する。

羞恥や理性は完全に麻痺し、代わりに牝の本能が全開になった。

牝ならば当然、牡の誘い方を知っている。性交して子孫を残すことを第一義に置いて設計されている生物は、すべて、発情すれば本能的に媚態を示す。

「ロ、ロぃ……紗夜の、ロぃぃ……オマンコなの、ロマンコなのぉ！　お口にも、オチンチン、挿入れてぇ！　紗夜の口マンコを、ヌポヌポ、してぇっ！」

涎を垂らしながら叫び、小さな口を大きく開ける。唾液に濡れた舌を閃かせ、いやらしく潤んだ紅い口腔粘膜を昂る牡たちに見せびらかして、

「マンコ、マンコ……お口も、マンコぉ……」

淫猥な歌を、知らず知らず口走る。

「く……くそぉおっ！」

ついに我慢しきれなくなった陸自隊員が立ち上がり、仲間の制止を振りきって紗夜に掴みかかった。しなやかな美少女のあられもない痴態を延々と見せつけられ、耐えに耐えてきたせいで、爆発的に乱暴だ。

「お、お前が……お前が悪いんだぞッ！」

揺れる黒髪を鷲掴みにして、小さな頭をグイッと引き下げる。

「お前がそんな、い、い、いやらしい声で鳴くから……俺は、俺は……く、くそぉっ！

お前が悪いんだからなッ！」
必死に言い訳しつつ、いきり立つ男根を戦姫の口へ寄せる。
「あ……あはぁ……」
生まれて初めて目の当たりにする普通のペニスに、紗夜は思わず見惚れてしまった。
なんと雄々しく、猛々しいのだろう。
尖端の肉クサビは弾けんばかりに怒張して、青臭く香る粘液を薄く滲ませ、いまにも燃え出しそうなくらい赤々と輝いている。緩く捻れた淫茎には恐ろしげな血管が浮き、艶やかに黒光りして、見るからに硬そうだ。
その色艶、その厳めしい形に、牝の本能が反応する。
（こ、これ……これよ……コレが本当の、オチンチ、ン……！）
イボなどなくていい、吸盤も要らない。
この太さ、この重量感、この香り――これこそが、本当に欲しかったモノ。
思ったときには口が開き、真っ赤な亀頭をアモッと咥え込んでいた。
（くぅうっ！　オチンチン……オチンチン、だぁッ！）
唇に感じる硬さ、熱。
舌を押し潰してくる重み、存在感。
淫肉をしっとりと輝かせていた粘液が、味蕾にじわりと甘辛い。
小さな口を目一杯開け、太くて硬くて熱くて長い淫棒をゆっくり、ゆっくり、受け入れ

ていくと、処女の口腔はたちまち生臭い牡肉でいっぱいになり牝の脳髄を痺れさせる草いきれのような精臭が気道を遡って鼻腔に満ちた。

「ン……じゅっ！」

しゃぶろうと思ってしゃぶったのではない。

本能に命じられるまま唇を締め、ゴツゴツした淫茎に舌を絡めただけ。

なのに――。

（あ、はぁ……！　これが、オチン、ちん……オチンチンって、美味しいッ！）

口腔を埋め尽くすたくましい太さに、紗夜はうっとりと目を細めた。上顎を押し上げてくる亀頭の硬さ、舌を押し潰してくる淫肉の重さも、胸がドキドキするほど気持ちイイ。

世の中に、こんなにも美味しい物があったとは。これほどしゃぶり甲斐のある物があったとは――いや、違う。そうではない。

（口、マンコ……そうだわ、お口もオマンコなのよ。アソコやお尻の穴と同じように、オチンチンを受け入れるために開いているいやらしい穴……だからこんなに、気持ち、イイんだ……！）

宇宙の真理に気づいたような気分になった紗夜は、口一杯に頬張った牡肉をむちゅ、じゅちゅ、と音が立つほど強く強く吸い始めた。

もちろん、しゃぶるだけではない。

淫棒に埋め尽くされてほとんど隙間のない口の中、懸命に舌をくねらせて熱い淫棒を舐

め回す。味の濃い場所を求めて裏筋を舐め、カリ首を舐める。あるいは舌の尖端で鈴口を抉るように穿って、先走り汁の味を愉しむ。
触手に腕を搦め捕られたままだから、咥え込んでいる淫棒を手で支えることはできない。だからこそ余計に強く、激しく、紗夜はペニスをしゃぶる。
「せ、戦姫が……オチンチンを……」
「あんなに美味しそうに……うぅ、く、くそぉっ！」
自制しきれなかった男たちが次々と立ち上がり、淫獣に堕ちた戦姫の周りに群がった。口は犯せないが、その代わりに柔らかな頬に、艶やかな黒髪に、己の淫棒を擦りつける。触手に絡みつかれている腕を引き寄せ、小さな手に黒光りする肉棹を押しつけて、ギュッと握らせる者もいる。
「あはは！　豚姫様ったら、大人気ね！」
「おっと、ダメよ！　そちらの戦姫は怪我してるから、下手に犯したら壊れちゃうわよ」
美島と越智に襲いかかろうとした陸自隊員をなぜか止めて、三尸が満足そうに頷く。
「もういいわ。イかせてあげて」
小さな手が振られ、魔物たちがいっそう激しくざわめいて――。
「ンぁっ⁉　ンぷ……ンぇあああっ⁉」
イボつきの亀頭で膣穴を突きまくられた紗夜が、太い男根を咥えたまま快感に喘いだ。尻穴をグボチュグボチュと掻き鳴らしている触手たちも微妙に動きを変え、直腸や肛門の

粘膜に新たな肉悦を次々と産みつけてくる。
（く、来る……あの白いドロドロが……美味しい精液が……来るッ！）
予感した紗夜は掌に感じる肉棒をギュッと握り締め、教えられたわけでもないのに激しくしごき始めた。口の中のペニスには、舌を絡めて唾液を塗す。尖らせた舌先で糸が縒れたような裏筋を舐め、立てた舌縁でカリ首の裏側を切るようにしごく。
どうすれば牡が悦ぶのか、考えなくても分かった。
触手に犯されている膣と尻穴を締め、愛液に潤んだ粘膜洞を小刻みに波打たせる。縮緬のように細かな膣襞が硬いイボイボのひとつひとつを舐めるように撫で回し、快感をお返しして射精を促す。
「ンッ!?　ン、ンぅうっ!?」
股間に閃く、激感。
紅く色づいてコリコリ硬く勃起していたクリトリスが、小さな吸盤に呑み込まれたのだ。
「ぇあ、ぇあ……ンじゅっちゅっ！」
吹き飛びそうな意識をなんとか繋いで、紗夜は口一杯に頬張った牡肉を必死にしゃぶる。
（らして、らして……しぇいえき、らしちぇえぇっ！）
舌だけでなく、思考の呂律も回らなくなってきた。自分がなにに犯され、どんな姿勢にされてどの穴を突きまくられているのかも、もう分からない。
精液を渇望する丹田にせっつかれて、左右の手に握り締めた男根をシュッシュとしごく。

唇や膣穴、肛門を締めて、激しく出入りしている淫棒を悦ばせる。
快感のお返しなのか、端を噛まれてあられもなく引き伸ばされている粘膜花弁に、小さな亀頭がいくつも群がってきた。尖端の小さな穴から先走り汁を滲ませ、愛蜜に濡れた淫唇をキュッキュとしごく。
クリトリスを咥えた吸盤は小さな肉豆を甘噛みし、乳房に群がった肉紐は瑞々しい弾力を蕩けそうなほど激しく揉み回し――。
「ン、ちゅ……ぷはぁあっ！　りゃ、りゃ、りゃぇえっ！　早く、早く、らしてぇっ！　もうらめ、らめなの……オマンコ、おマんコぉおっ！」
身体のあちこちに弾ける快感に追い立てられ、ついにペニスを吐き出して喘ぐ紗夜。
意識はすでに飛びかけている。浮いているような、堕ちているような、ワケの分からない状態――だが、なぜかイけない。なにかが足りない。
「しぇいえき……しぇいえきぃいっ！　出して、かけて……ビュクビュク、してぇッ！」
絶叫する美少女を追って、尻穴や膣に潜り込んだ触手が一斉に突き上げを強めた。愛液にぬめる膣穴が艶やかに捲れ返り、紅く潤んだ粘膜がグチュッ！　ニュチッ！　と卑猥な音を立てて歪む。尻穴を犯した無数の触手は繊細な直腸粘膜を突きまくり、揉み立てて、
「にゃ、にゃ、あぇえぇっ！」
紗夜の口から悦びの声を迸らせた。
「く、くそぉ……ッ！　いやらしい豚姫めっ！　ぶっかけてやる！」

「髪……髪ッ！　こんなに綺麗な……女のコの、髪ぃぃっ！」
紗夜の顔にペニスを突きつけ、激しく腰を振りまくる男たち。
ほっそりとした女体に絡みついた触手も、人間の牡に合わせたように触手をくねらせ、肉イボや吸盤をいやらしく蠢かせて――。
「あひっ⁉　あ、あ……あひぃいっ！　も、もうらめ、らめらめ……らめぇえぇっ！　おかしくなる、おかしくなっちゃ、うぅううっ！」
延々と続く快感に悶え鳴く紗夜、そのふたつの肉穴の奥で、触手が急に変化した。
鋼のように硬くなる。燃えているように熱くなる。
小刻みに震え、ギチチ、ミチチ、と軋みながら太さを増し――。
「あ、あぁッ！　来る、くるくる……くるぅううっ！」
――びゅくっ！　びゅぱぱっ！　どぴゅぴゅっ！
膣と尻穴を犯し、全身に群がった触手が、一斉に果てた。
「りゃひぇぇぇえっ⁉　れ、れてるれてる、中に、一杯……れちぇるぅううっ！」
ドクドクと脈打ちながら子宮へ注ぎ込まれる、大量の精液。
いくつもの亀頭に責めまくられて淫穴と化した直腸にも、熱く粘つく牡エキスが何度も何度も噴きかけられる。
魔物たちだけでなく、紗夜の頬を犯し、長い黒髪を穢していた男たちも、日々の訓練によって鍛えられた臀部を鋭く引き締め――どぷっ！　びゅくっ！

びゅるるっ！　びゅく、びゅく、びゅく――。
こらえにこらえていた劣情を一気に迸らせる。
「にゃっ⁉　あ……にゃぁああっ！」
全身に白濁液を浴びせられた紗夜が、背を駆け抜ける熱い突風に煽られて、バネ仕掛けのように反り返った。
咽ぶほどの精臭に、頭の芯が真っ白に痺れる。
精液を大量に呑まされ、浣腸されたせいで、鮮烈な青臭さを嗅ぐとイッてしまう体質になっていたのだ。
「い、い……イくぅうッ！　しぇいえき、どぴゅどぴゅ……いっぱい、びゅくびゅく……あ、は……はぁぁンッ！　しぇいえき、しぇいえきぃいっ！」
絶頂に達した女体はしなやかに反ったまま、プルプル、プルプル、と痙攣。
意識は白濁し、ドロドロに熔けて、なにもかもがどうでもよくなり――。
「あぁ、ぁあ、あああぁ……」
涎をこぼして喘ぐ唇に、法悦の涙に濡れて恍惚に赤らんだ柔らかな頬に――べちゃ！　びちゃ！　揺らめく瞳を護るバイザーにも――びゅくり、どぷり。
赤々と輝く亀頭がなおも精液を噴きかける。
麗らかな朝陽を浴びて艶々と輝いていた漆黒の胸元にも、薄布を突き破らんばかりに勃起している淫らな乳首にも、香汗を吸ってしっとりと濡れた長い黒髪にも――生臭い糸を

引く大量の臭液が、無遠慮に、容赦なく、次々と降り注ぐ。
（しぇい、えき……らぁ……）
出されたばかりの、本物の精液は、こんなにも熱くてネバネバしているのか――心地よい感動を覚えつつ、紗夜は放心した。
額から瞼へネロネロと垂れ落ちていく、温かな粘液。小鼻を濡らし、唇を穢し、細い顎から氷柱のようにツウッと伸びて――漆黒のインナースーツに浮き上がった形よい乳房にも青白い滴がいくつも貼りつき、ヌラヌラといやらしい光を放つ。
（ああ、熱い……あ、ちゅ……イィィ……）
穴も、頬も、小振りな乳房も――射精を受けた場所が、火傷しそうなくらい熱い。
痺れるほどに心地よい。
「あ……はぁ……しぇいえき、しゅき……もっとかけて……もっといっぱい、びゅくびゅく、してぇ……」
濃密な精臭を胸一杯に吸い込み、肉の悦びに溺れる紗夜。
まだ呑める、まだ欲しい――だれのモノでもいい、魔物の精液でも構わない。
「もっと、もっと……もっとぉぉお……ッ！」
頭の天辺から緋色のブーツに護られた爪先まで、いやらしくぬめり光る白濁液に濡れてぬちょぬちょになりながら、淫獣に堕ちた美少女は媚笑を浮かべ、淫らに鳴き続けた。
――そして。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円（税込）

魔海少女ルルイエ・ルル2

［小説：羽沢向一／挿絵：ピエ～ル☆よしお］

全国書店で好評発売中

クトゥルフの娘たちが学園祭でメイドさんに変身!?

ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

ピルグリムメイデンⅢ 復讐の魔神

［小説：狩野景／挿絵：ぽち。］

全国書店で好評発売中

少年（カノジョ）に封じられた魔神降臨の刻（とき）!

玲音と冬馬、交差する2人の物語、衝撃の最終章（クライマックス）へ!

魔法妊婦ハラマセ∞ハラスメント

［小説：上田ながの／挿絵：瀬上大輔］

全国書店で好評発売中

お腹の子供のパパを探してます!!

ボテ腹魔法少女が父親探しにひたすらHl!

既刊LINEUP 全国書店で好評発売中

- ●仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①～③
- ●BLANGEL 軸になりて踊る悪者の夜
- ●不死の吸血鬼がドSの二主人様を募集しているようです
- ●思春期なアダム ①～③
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】
- ●女幹部メル様のセカイ征服計画!
- ●借金お嬢クリス ①～③
- ●無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売） FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!